別 3
87

少年

讀篇

国立国会図書館　タイトル『少年』 請求記号 本別3-87

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『少年』　請求記号 本別3-87

ガラス使用

中央公論小說三

京湾

保吉の海を知つたのは五戈か六才の頃である。尤も海とは云ふものの萬里の大洋を知つたのではない。唯大森の海岸に東京湾の狭苦しい東京湾を知つたのである。

一 海

十ノ廿松屋製

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号 本別3-87

ガラス使用

当時の保吉には驚異だった。奈良朝の歌人は海に寄する恋を「大船の香取の海に碇おろし如何なる人のもの思はざらん」と歌った。保吉は勿論恋も知らず、萬葉集の歌などと云えものはなほ更一つも知らなかった。が、日の光りに煙った海の何の妙にもの悲しい神秘を感じさせたのは事実である。彼は海へ張り出した葭津張りの茶屋の手すりにいつまでも海を眺めつづけた。海は由じろと赤いた帆のけ船を何艘も浮のべてゐる。長い煙を空へ引いた二本

十ノ廿松屋製
(SM国 B…1)

国立国会図書館 タイトル『少年』 請求記号 本別3-87
ガラス使用

マストの汽船も浮のべてゐる。

翼の長い一群の鴎は丁度猫のやうに啼きのはしふがら、海面を斜めに飛んで行つた。

あの船や鴎は何處のら来、何處へ又行つてしまふのであらう？

海は唯幾重のの海苔麋朶の向うに青あをと煙つてゐるばのりである。……

けれども海の不可思議を一層鮮のに感じたのは裸になつた父や叔父と遠浅の渚へ下りた時である。

保吉は始め砂の上へ靜のに寄せて来るさざ波を怖れた。

が、それは父や叔父と其三多の後は

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号　本別3-87
ガラス使用

中央公論小說三

海の中へはひりこけたほんの二三分の感情だった。その後の彼はさぞ彼は勿論、あらゆる海の幸を享楽した。茶屋の手すりに眺めてゐた海は何處の見知らぬのやうに、珍らしいと同時に無気味だった。しかし干潟に立つて見る海は大きい玩具箱も同じことである。玩具箱！彼は実際神のやうに海と世界云ふ世界を玩具にした。磐や寄生貝は眩ゆい干潟を右往左往に歩いてゐる。浪は今彼の前へ一ふさの海艸を運んで来た。あの喇叭に似てゐるのも

十ノ廿松屋製
(SM製 B…1)

国立国会図書館　タイトル『少年』 請求記号 本別3-87
ガラス使用

中央公論小說三

やはり法幢貝と云ふのであらうか？　この砂の中に隠れてゐるのは浅蜊と云ふ貝に違ひない。……

保吉の享樂は壯大だつた。けれども（このう云ふ）手の享樂の中にも多少の寂しさのなかつた訣ではない。彼は從來海の色を青いものと信じてゐた。両国の「大平」に賣つてゐる月耕や年方の錦絵をはじめ、当時流行の石版画の海はハづれも同じやうにまつ青だつた。殊に縁日の「のら」くりの見せる黄海の海戰の光景などは黄海と

十ノ廿松屋製
（SM 印　B…1）

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号　本別3-87
ガラス使用

云々のにも関らず、毒々しいほど青い浪に白い浪がしらを躍らせてゐた。しかし目前の海の色は――成程目前の海の色も沖だけは青あをと煙つてゐる。が、渚に近い海は少しも青い色を帯びてゐない。正にぬかるみのたまり水と選ぶ所のない泥色をしてゐる。いや、ぬかるみのたまり水よりも一層鮮かな代赭色をしてゐる。彼はこの代赭色の海に豫期を裏切られた寂しさを感じた。しかし又同時に旁敢にも残酷な現実を承認した。海を青いと考へ

十ノ廿 松屋製

国立国会図書館　タイトル『少年』 請求記号 本別3-87

ガラス使用

中央公論小說二

るのは沖だけ見た大人の誤りである。これは誰でも彼のやうに海水浴をしさへすれば、異様のない眞理に違ひない。海は実は代赭色をしてゐる。バケツの錆に似た代赭色をしてゐる。

三十年前の保吉の態度は三十年後の保吉にもそのまま当嵌る態度である。代赭色の海を承認するのは一刻も早いのに越したことはない。且又この代赭色の海を背ハ海に変へようとするのは所詮徒勞に軍るだけである。そ

十ノ廿松屋製
(SM B…1)

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号 本別3-87
ガラス使用

れよりも代赭色の海の渚に美しい貝を発見しよう。

海もそのうちには沖のやうに一面に青あをとふるのも知れない。

が、将来に惝がれるよりも寧ろ現在に安住しよう。

――保吉は豫言者的精神に富んだ二三の友人を尊敬しながら、しかも心の一番底には相不変ひとりのう思つてゐる。

大森の海のり歸つた後、母は何處のへ行つた歸りに「日本昔噺」の中にある「浦島太郎」を買つて来てくれた。

のう云ふお伽噺を讀んで貰ふ

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号 本別3-87

ガラス使用

中央公論小説二

ことの楽しみだったのは勿論である。が、彼はその外にももう一つ楽しみを持ち合せてゐた。それはあり合せの水画の具に一一挿画を彩ることだった。彼はこの「浦島太郎」にも早速彩色を加へることにした。「浦島太郎」は一冊の中に十ばかりの挿画を含んでゐる。彼はまづ浦島太郎の龍宮を去るの図を彩りはじめた。龍宮は緑の屋根瓦に赤い柱のある宮殿である。乙姫は――彼はちょっと考へた後、乙姫もやはり衣裳だけは一面に赤い色を浴上ることに

十ノ廿松屋製
(SM 図 B…1)

国立国会図書館　タイトル『少年』 請求記号 本別3-87
ガラス使用

中央公論小說三

した。浦島太郎は考へずとも好い。漁夫の着物は濃い藍色、腰簑は薄い黄色である。唯細い釣竿にずつと黄色をあするのは存外彼には むづかしかった。簑亀も毛だけを絲に塗るのは中々あまやさしい仕事ではない。最後に海は代赭色である。バケツの錆に似た代赭色である。――保吉はのう云ふ色彩の調和に藝術家らしい満足を感じた。殊に乙姫や浦島太郎の顔へ薄赤い色を加へたのは頗る[illegible]生動の趣でも[illegible]たものの[illegible]やうに信じてゐた。

十ノ廿松屋製
(SM 印 B…1)

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号 本別3-87
ガラス使用

保吉は匆々母のところへ彼の作品を見せに行った。何か縫ものをしてゐた母は老眼鏡の額越しに挿画の彩色へ目を移した。彼は当然母の口から褒め言葉の出るのを豫期してゐた。しかし母はこの彩色にも彼ほど感心しないらしかった。

「海の色は可笑しいねえ。なぜ青い色に塗らなかったの？」

「だって海はかう云ふ色なんだもの。」

「代赭色保吉はの海なんであるものかね。」

十ノ廿松屋製

(SM B…1)

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号　本別3-87

ガラス使用

中央公論小說三

「大森の海は代赭色ぢやないの？」

「大森の海だつてまつ青だあね。」

「ううん、丁度こんな色をしてゐた。」

母は彼の剛情さ加減に驚嘆を交へた微笑を洩らした。

「が、どんなに説明しても、――いや、痼癖の起した彼の「浦島太郎」を引き裂いた後さへ、この疑ふ余地のない代赭色の海だけは信じなかつた。……

「海」の話はこれだけである。

尤も今日の保吉は話の体裁を整へるぬに、もつと小説の結末

十ノ廿松屋製

(SM版 B…1)

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号 本別3-87

ガラス使用

らしい結末をつけることも困難ではない。たとへば話を終る前に、このう云ふ數行をつけ加へるのである。――「保吉は母との問答の中にもう一つ重大な発見をした。それは誰も代赭色の海には、――人生に搦はる代赭色の海にも目をつぶり易いと云ふことである。」

けれどもこれは事実ではない。のみならず満潮は大森の海にも青い色の浪を立たせてゐる。すると現実とは代赭色の海の、それとも亦青い海色の海か、？ 所詮は我々のリアリズム

すノ廿松屋製

(SM図 B…1)

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号　本別3-87

ガラス使用

も甚だ当にならぬと云ふ外はない。

のたがた保吉は前のやうに無技巧に話を終ることにした。

が、話の体裁は？――藝術は諸君の云ふやうに何よりもまづ内容である。形容などはどうでも差支へない。

二 [illegible]燈

保吉の七才の時である。彼は父に手を引かれたまま、両国の或玩具屋へはひつた。玩具屋は当時には珍らしい、床にずつと色瓦を敷いた、西洋風の店構へである。

が、格別厳い訣

十ノ廿松屋製

(SM B…1)

二　約燈

このランプへのう火をつけて頂きます。

玩具屋の主人は金屬製のランプへ黄色ハマツチの火をともした。それから約燈の後ろの戸をあけ、そつとそのランプを案械の中へ移した。七才の保吉は息もつかずに、テエブルの前へ及び腰にかつた主人の手もとを眺めてゐる。綺麗に髪を左のら分けた、好に色の蒼白い主人の手もとを眺めてゐる。時間は平均と三分頃であらう。玩具屋の外の往来は一ぱ

十二ポイント

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号 本別3-87
ガラス使用

いに当つた月の光りの中に絶え間のない人通りを映してゐる。

「が、玩具屋の店の中は――殊にこの玩具の空箱などを無造作に積み上げた店の隅は日の暮の薄暮さと変りはない。保吉は此處へ来た時に何の気味悪さに近いものを感じた。しかし今は幻燈に――幻燈を映して見せる主人にあらゆる感情を忘れてゐる。いや、彼の後ろに立つた父の存在さへ忘れてゐる。

「ランプを入れて頂きますと、あちらへああ

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号 本別3-87

ガラス使用

月は出ますのら、」

やつと腰を起した主人は保吉と云々よりも寧ろ父へ向うの白壁を指し示した。幻燈はその白壁の上へ丁度差渡し三尺ばかりの光りの円を描いてゐる。柔かに黄ばんだ光りの円は成程月に似てゐるのもそれ云ふ。

「蜘蛛の巣や埃も其處だけはありありと目に見えてゐる。

こちらへのう画をさすのですな。」

のたりと云々音の聞えたと思ふと、光りの

十ノ廿松屋製
(SM 8…1)

国立国会図書館　タイトル『少年』 請求記号 本別3-87
ガラス使用

円はいつの間に面のぼんやりと何か映してゐる。

係吉は金属の熱する匂に一層好奇心を刺戟されながら、ずつとその何かへ目を注いだ。

何か――まだ其處に映つたものは風景の人物かも判然しない。

唯僅かに見分けられるのは大きい石鹸玉に似た色彩である。

はこの方

や、色彩の似たばかりではない。

この白壁に映つてゐるのはそれ自身大きい石鹸玉である。

夢のやうに何處から漂つて来た薄明りの中の石鹸玉である。

十ノ廿松屋製

(SM 印 B…1)

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号 本別3-87

ガラス使用

「あのぼんやりしてゐるのはレンズのヒントを合せさへすれば――この前にあるレンズですな。――直に即覧の通りはつきりあります。」

主人はもう一度及び腰になった。と同時に石鹸玉は見る見る一枚の風景画に変った。尤も日本の風景画ではない。水路の両側に家々の聳えた何處の西洋の風景画である。時刻はもう日の暮に近い頃であらう。三日月は右手の家々の空にのすのに光りを放つてゐる。

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号 本別3-87
ガラス使用

の又三日月も、家々も、家々の窓の薔薇の花もひつそりと湛へた水の上へ鮮かに影を落してゐる。人影は勿論、見渡したところ鴎一羽浮かんでゐない。水は唯突当りの橋の下へまつ直に一すぢつづいてゐる。

「イタリヤのベニスの風景でございます。」

三十年後の保吉にヴェネチアの魅力を教へたのはダンヌンチオの小説である。けれども当時の保吉はこの家々だの水路だのに唯たよりのない寂しさを感じた。彼の愛する風景は大きい

十ノ廿松屋製
(SM B…1)

国立国会図書館　タイトル『少年』 請求記号 本別3-87
ガラス使用

中央公論小說三

母塗りの観音堂の前に無数の鳩の飛ぶ淺草である。

鉄は又高い時計台の下に鐵道馬車の通る銀座である。それらの風景に比べると、この家々だの水路だのは何と云ふ寂しさに満ちてゐるのであらう。

鐵道馬車や鳩は見えずともいい。せめては向うの橋の上に一列の汽車でも通つてゐたら、――丁度のう思つた途端である。

薔薇のあつ花をあつ髪つけ挿した
可愛ゆ女の一人、右手
大きいリボンをした

家々の窓の一つ

に並んだ窓のうち突然小さい顔を出した。どの窓のははつきり覚えてゐない。しの

国立国会図書館　タイトル『少年』 請求記号 本別3-87
ガラス使用

し大体三日月の下の窓だつたことだけは確可である。少女は顔を出したと思ふと、実にその顔をこちらへ向けた。それから――遠目にも愛くるしい顔に疑ふ余地のない頬笑みを浮べた！　が、それは掛け價のない一二秒の間の出来ごとである。思はずお「やと目を見はつた時には、少女はもう~~もう少女は~~いつの間にか窓の中へ姿を隠したのであらう。窓はどの窓も同じやうに人気のない窓のけを垂らしてゐる。……

十ノ廿松屋製
(SM B…1)

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号 本別3-87
ガラス使用

「さあ、もう映しうたはわうつたらうア」

父の言葉は花々とした彼を現実の世界へ呼び戻した。父は葉巻を啣へたまま、退屈さうに後ろに佇んでゐる。玩具屋の外の往来も相不変人通りを絶たないらしい。主人も――

女婦麗に髪を分けた主人は小手調べをすませた手品師のやうに、妙に蒼白い頬のあたりへ満足の微笑を漂はせてゐる。保吉は急にこの約燈を一刻も早く彼の部屋へ持つて歸りたいと思ひました。――――――

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号　本別3-87
ガラス使用

保吉はその晩父と一しよに蠟を引いた布の上へ、もう一度ヴェネチアの風景を映した。中空の三日月、両側の家々、家々の窓の薔薇の花を映した一すぢの水路の水の光り、――それは皆等に見た通りである。が、あの愛くるしい少女だけはどうしたのか今度は顔を出さない。窓と云ふ窓はいつまで行つても、だらりと下つた窓のけの後ろに家々の秘密を封じてゐる。保吉はとうとう待ち遠しさに堪へ兼ね、ランプの具合などを[illegible]気にしてゐた父へ歎

(SM[illegible] B…1)

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号 本別3-87
ガラス使用

願すらやうに話し
~~父に話もの中~~ 候。しかけた。

「あの女の子はどうしてあるいの？」

「女の子？　何處かに女の子がゐるのかい？」

父は保吉の問の意味さへ、はつきりわからない容子である。

「ううん、みはしるいけれども、窓の見て頬だけ窓の
ら出したずやるいの
~~ひとり頬だけ窓の~~？」

「いつさ？」

「玩具屋の壁へ映した時に。」

「あの時も女の子なんぞは出やしるいさ。」

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号　本別3-87
ガラス使用

中央公論大正十三年五月号所載文に照合

末尾左記欠

「だつて顔を出したのが見えたんだもの。」

「何を云つてゐる？」

父は何と思つたか保吉の額へ手のひらをやつた。それから急に保吉にもつけ景氣とわかる大聲を出した。

「さあ、今度は何を映さう？」

けれども保吉は耳にもかけず、ヴェネチア

国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号　本別3-87
ガラス使用

の風景を眺めつづけた。窓は明るい水路の水に静かな窓かけを映してゐる。しかしいつかは何處かの窓から、大きいリボンをした少女が一人、突然顔を出さぬものでもない。――

彼はかう考へると、名状の出來ぬ懐しさを感じた。同時に從來知らなかつた或る烈しい悲しさをも感じた。あの畫の幻燈の中にちらちらと顔を出した少女は實際何か超自然の靈の彼の目に姿を現はしたのであらうか？　或は又十年に起り易い幻覺の一種に過ぎなかつたのであらうか？　それは勿論彼自身にも解決出來ないのに違ひない。

が、兎に角保吉は三十年後の今日さへ、しみじみ塵勞に疲れた時にはこの永久に歸つて來ないヴェネチアの少女を思ひ出してゐる、丁度何年も顔さへ知らない初戀の女人でも思ひ出すやうに。

（上野図書館原稿用紙）

20×20

国立国会図書館　タイトル『少年』 請求記号 本別3-87

ガラス使用

国立国会
29.3.8
図書館

u 37805

No.

（上野図書館原稿用紙）

20×20

国立国会図書館　タイトル『少年』 請求記号 本別3-87

ガラス使用

別 3
87

国立国会図書館　タイトル『少年』 請求記号 本別3-87

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『少年』　請求記号　本別3-87